

コアシンポジウム 3

「消化管機能性疾患の新展開」過敏性腸症候群の分子病態と新展開

New trends in functional GI disorders: molecular pathogenesis of IBS

主司会 杉山敏郎（富山大学大学院地域がん予防・治療学推進講座）

副司会 中島 淳（横浜市立大学大学院医学研究科肝胆膵消化器病学教室）

「過敏性腸症候群 (IBS)」は、機能性消化管障害のなかで下部消化管を中心とした症状、特に便秘、下痢を主症状とした症候群であるが、その病態は未解明な点が多く、根治的治療法は未だ確立していない。IBS の病因として、従来からの消化管運動異常、内臓知覚異常、社会心理的ストレスに加え、post-infectious IBS に代表される何らかの持続する炎症、細胞透過性亢進、さらに腸内細菌叢の異常などから研究が進められてきた。IBS は便秘型あるいは下痢型と分類はされるが、本質的には、便秘、下痢を繰り返すことも特徴である。近年、腸上皮細胞および腸粘膜における便通に関わる分子機構が明らかにされ、通常の便秘あるいは下痢と密接に関連する病態分子を標的とした新規治療薬が登場してきたが、それらも含め、IBS に関わる分子病態の異常、あるいは各々の因子間の相互作用から IBS の本体に迫る研究が望まれる。本コアシンポジウムでは、IBS 病態を分子レベルで解明する基礎的あるいは臨床的研究を募り、病態の真髄に迫りたい。